

氏名	宮崎 智子		
ヨミガナ	ミヤザキ トモコ		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	博第9号		
学位授与年月日	平成30年11月26日		
学位論文題目	ベートーヴェンのヴァイオリンソナタ研究 ——二楽器のアンサンブルの視点から——		
博士論文審査委員会	（主査）	教授	岡田 敦子（ピアノ）
	（副査）	教授	武石 みどり（音楽学）
	（副査）	客員教授	播本 枝未子（ピアノ）
	（副査）	准教授	山洞 智（ピアノ、ピアノ伴奏）
	（副査）	准教授	藤田 茂（音楽学）
	（副査）		小岩 信治（音楽学）
			（一橋大学大学院言語社会研究科教授）
博士演奏等審査委員会	（主査）	教授	岡田 敦子（ピアノ）
	（副査）	教授	播本 枝未子（ピアノ）
	（副査）	教授	土田 英介（ピアノ、ピアノ伴奏）
	（副査）	教授	大谷 康子（ヴァイオリン）
	（副査）	教授	藤原 豊（作曲）
	（副査）	准教授	山洞 智（ピアノ、ピアノ伴奏）
	（副査）	准教授	秋山 隆典（声楽）
	（副査）	准教授	藤田 茂（音楽学）
	（副査）		江口 玲（ピアノ）
			（東京藝術大学准教授）

審査結果の要旨

1. 博士論文審査委員会

日 時	平成 30 年 10 月 3 日 (水) 18 時 00 分～20 時 30 分
場 所	東京音楽大学 J208
判 定	合
審査結果の要旨	<p>ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタについて、その「アンサンブルの様態」に関する研究はまだ萌芽的な状態にあるが、本論文はそれをソナタ形式である 1 楽章を対象として全 10 曲にわたって丁寧に行い、ベートーヴェンのこのジャンルの一側面に新たな光を当てたと言える。</p> <p>とくに、一般的に「ヴァイオリン」と「ピアノ」という 2 つのパートの組み合わせとして捉えられているアンサンブル形態を、「ヴァイオリン・パート」「ピアノの右手」「ピアノの左手」の 3 つのパートの組み合わせとして捉えるという視点はオリジナルなものである。この方法を用いて、本論文は分類の根拠を示しつつアンサンブルの様態として 9 つのタイプを抽出し、さらにそれらの楽章内における配置を観察することによって、作曲年代との関連を考察するという包括的な研究に至っている。その成果の一つとして、作曲年代として 10 年の隔りがある第 9 番と第 10 番の間より、むしろ第 3 番と第 4 番の間、つまり初期の終わりの時期にアンサンブルの変化のポイントが見られるという指摘は、ベートーヴェンの作曲様式の発展の一局面を捉えて直しているだけでなく、演奏上の示唆としても注目すべきものである。</p> <p>ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタについて、「アンサンブル」という観点から新たな光を当てたこと、また、それが演奏解釈に豊かな示唆を与える可能性をもっていることを評価し、演奏を専門とする者の博士論文として適切であると判断した。</p>

2. 博士演奏等審査委員会

日 時	平成 29 年 2 月 7 日 (火) 19 時 00 分～20 時 10 分
場 所	東京音楽大学 B スタジオ
判 定	博士研究との関連をもったプログラミングであり、演奏も相当のレベルと認められるため、全員一致で合格と判定した。
審査結果の要旨	<p>「ピアノとヴァイオリンの関わり合い」という博士研究に沿って、ベートーヴェンのヴァイオリンソナタ第 3 番、第 4 番、第 10 番が演奏された。いずれの曲も準備され、安定した演奏とすることができる。</p> <p>ただし、演奏後に、審査員のなかから本人の話を聞きたいという声上がり、本人を呼んで質疑応答を行った。</p> <p>外部審査員の江口委員からは、「研究が演奏にどう反映したか」「ソナタ第 3 番におけるヴァイオリンとピアノのアーティキュレーションの指示の違いをどう扱ったか」「当時の楽器と現在の楽器の違いによって、工夫したことはあるか?」「ヴァイオリンとの関わり合いを演奏しようとしたのか、それともベートーヴェンを演奏しようとしたのか」などの質問があり、作曲年代による様式の違いを表現しようとしたこと、アーティキュレーションの違いは意図的に記されたものと捉えていること、当時の楽器との違いはペダルの用法などに反映させていること、アンサンブルの様態を表現するよりもベートーヴェンそのものを演奏しようとしていることなどが、明快に回答された。</p> <p>弦楽器からの審査員である大谷委員からは、「ヴァイオリンとの関わり合いということから、主従の関係が交替するののかと思ったが、あまりそのようには聴こえなかった」という意見が出されたことに関しては、「こちらが合わせた箇所も、ヴァイオリンに合わせてもらった箇所もある」と回答していた。</p> <p>全体としてピアノのパートは十分に準備された演奏ではあったが、さらに楽譜の読みを深くし、研究を演奏に反映させることが必要であるという指摘があった。また、共演したヴァイオリニストに対して、もっと音色や表現が多彩であったならば、演奏全体が異なるものになっただろうという声も多かった。さらには、ピアノの調律が狂っていたことも話題に上り、調律のスケジュールを管理することもコンサートの一部であり、演奏家の責任であることが指摘された。</p> <p>全体的な評価としては、共演者との関係について、研究との関連づけについて、コンサートの進行についてなど今後の課題は残るが、ピアノの演奏そのものは肯定的に評価され、全員一致で合格と判定された。</p>

以上